

学会ハイライト

第82回日本皮膚科学会東京支部学術大会

(平成30年12月1日, 2日, ザ・プリンスパークタワー東京)

松江 弘之

千葉大学大学院医学研究院皮膚科学 教授

はじめに

2018年12月1日と2日に、第82回日本皮膚科学会東京支部学術大会を開催いたしました。前任の新海浜教授が第68回の会長をされたのが2005年ですので、13年ぶりに千葉大学が主管校としてこの伝統ある学術大会を開催させていただきました。

師走に入ったばかりの忙しい時期に、初めての会場での開催となりましたが、全国より多数参加いただいたことは驚きであるとともに、皆様に対して感謝の気持ちでいっぱいです。

学会テーマ

今回の学会テーマは「多彩な皮膚科の未来に向かって Diversity for Future Dermatology」といたしました。皮膚科の特徴の一つはいうまでもなく疾患数が多いことですが、その多彩な皮膚科の疾患の病因解明、病態理解、治療法開発が近年、著しく進んでおり、今後も未来に向かって発展し続けると思います。その発展の核となるのはDiversity (多様性)の尊重ではないでしょうか。多様性は発展の根底にあるアイデアを育むだけでなく、本質を多角的に捉える視点を生み出します。Future Dermatologyの発展にとって(for)重要なのはDiversityの尊重ではないかと思い、テーマをそのようにいたしました。

3人の恩師

個人的には、多様性の尊重を教えてください、あるいは多様性を尊重して私をご指導くださった3人の恩師、北海道大学時代の大河原章先生、米国Southwestern Medical Center時代の高島明先生、そして山梨大学時代の島田眞路先生をお招きできましたのはたいへん感慨深いことでした。実は、私が北大皮膚科に入局した1987年の8月に開催された、大河原先生が会頭の第12回日本研究皮膚科学会で高島先生が発表されたとき、島田先生と激論を交わしている光景が強く印象に残っております。そのときには、このお二人が私の生涯のメンターになるとは思っていませんでした。

プログラム

本大会のプログラムとして、招待講演1題、特別講演2題、特別シンポジウム1題、AMED協賛シンポジウム、シンポジウム9題、教育講演9題、教育プログラム2題、企画講演1題、ハンズオンセミナー8題を企画しました。一般演題も全国から約150演題をご応募いただきました。

招待講演には私の恩師である先述の高島明先生をお招きしました。米国の皮膚科の医局と研究事情、先生ご自身の研究の進め方(アイデア→実験の進め方→発表)などについてお話しいただき、若い先生方にとって、大変刺激になったと思います。



図1
学会ポスター。ポスター，プログラム表紙のコンセプトは多彩，簡潔，目立たないように。しかし，ユニバーサルデザインに配慮して，学会事務局の原案イメージを生かしてイラストレーターに描いていただいた。



図2 コングレバッグ。"軽く，折りたたため，必要時に鞆から取り出せる"がコンセプト。ロゴは学会事務局が作製

2つの特別講演は感染制御がテーマで，HIV/AIDS治療薬の開発で世界のトップランナーである満屋裕明先生(国際医療研究センター研究所所長，米国NIH/NCIレトロウイルス感染部部長)のご講演では，HIV/AIDS治療薬を進化させ続けている先生の熱い情熱を感じ，強く感銘を受けました。先生に続く若い研究者が今後も日本から出てくればと思います。もう1つは国内外の感染症診療・治療で活躍されている大曲貴夫先生(国際感染症センター長)に感染症の最近の話題から，日本の国際化に伴う感染症と耐性菌の対策について素晴らしいご講演をしていただきました。

また，特別シンポジウムのFuture Dermatologyでは，近未来の医療がどのように変化するかを，医療データ，AI，遺伝子データ，遺伝子データの個への応用など異なる視点で4人のシンポジストにお話しいただきました。AMED協賛シンポジウムは，昨年，AMEDに採択された日本皮膚科学会の皮膚科におけるAIについての研究課題を，学会員に周知する最初の機会にさせていただきました。学会テーマとも合致し，たいへん素晴らしかったと思います。その他，シンポジウム，教育講演では，日常診療で診察する頻度の高い疾患(蕁麻疹，アトピー性皮膚炎，乾癬，脱毛，白斑，下腿潰瘍など)を取り上げ，最新の病態理解と治療法についての

ご講演，また，好評のダーモスコピーと皮膚病理の教育プログラム，ハンズオンセミナーでは，皮膚・関節エコー診断，フットケア，プリックテスト，巻き爪・陥入爪，皮膚外科セミナーを企画いたしました。どれも盛況でした。参加された皆様一人ひとりにとって，有意義で楽しい学術大会になったのではないのでしょうか。会期と会場数の問題で，同時並行で多くのプログラムが進行しましたが，日本皮膚科学会のサイトから，e-learningで聴講できますので，見逃したプログラムをご視聴していただければと思います。

おわりに

2700名を超える大勢の皆様に参加していただきました。すべての会場がワンフロアにあり移動に便利であったと思う一方で，移動する際に通路が人で一杯になりご不便をおかけしました。懇親会にも多数参加していただき，食事が足りなくなるという予期せぬ事態に陥りましたが，楽しく過ごしていただけていれば嬉しく思います。最後に，今回の学会に多大な尽力をしていただきました事務局長の若林正一郎先生，日本皮膚科学会の山田紀子様，総会・学術チームの皆様，プログラム委員，千葉大学皮膚科学教室員，ならびに同門会員の皆様に学会を代表して心よりお礼申し上げます。